

チェコ語の所有文と存在文が表す全体部分関係

浅岡 健志朗

kenshiro.asaoka1990@gmail.com

キーワード： チェコ語 所有 全体部分関係 存在 経験のゲシュタルト

要旨

チェコ語¹の HAVE 型他動詞文（所有文）²は所有の中核的意味³を表すが、これが表現しうる関係の範囲は明らかにされていない⁴。中核的意味のうち全体部分関係には所有文と存在文のどちらでも表現できるものがあることに着目し、両者を対照すると、①所有文でのみ表現できる関係（例：机と脚）②両者ともに表現できる関係（例：城と堀）③存在文でのみ表現できる関係（例：机と本）があることが分かる。この振る舞いの違いには、二つの要因が関与している。すなわち、部分（存在物）が全体（場所）に対してどれだけ不可欠で不可分かという程度（内在性）と、この二者間の関係がどれだけ時間的に安定しているかという程度（恒常性）である。①の関係は②の関係よりも内在性が高く、②の関係は③の関係よりも恒常性が高いという一般化ができる。この二つの要因が、対象の関係を全体部分関係として捉えるか存在として捉えるかに関わっている。

一方、一時的な関係であるにもかかわらず所有文で表現される場合がある。このような事例の中には、それがコントロールを含む関係であるということによって動機づけられているもの、位置関係を示すという機能によって動機づけられているもの、主語の指示対象を対比される他の対象と区別するという機能によって動機づけられているものがある。

恒常性と内在性は、典型的な全体部分関係のゲシュタルトを構成する特徴の一部として位置づけることができる。

¹ 印欧語族スラヴ語派西スラヴ語群。基本語順はSVO。七つの格（主格、属格、与格、対格、呼格、前置格、造格）を持ち、主に情報構造に応じて柔軟に語順が入れ替わる。

² 主語と目的語はそれぞれ主格と対格でマークされる。述語は主語の人称・数・性に一致するが、本稿のグロスでは性の表示を省略する。HAVE型という叙述所有の分類に関しては Heine (1977) を参照。

³ 所有として括られる様々な関係の中でこれらが中核的とされるのは、これら三つの関係が特定の構文によって表現される関係として共起する通言語的な強い傾向が存在するためである。Taylor (1996)、Langacker (2009)、Aikhenvald (2013) を参照。

⁴ チェコ語の所有を包括的に扱った先行研究として Pittha (1992) があり、主に4章で動詞 *mit* を扱っている。

1. はじめに

チェコ語のHAVE型動詞 *mít* を主動詞とする文、すなわち主語（所有者）＋動詞 *mít* ＋直接目的語（所有物）という構造を以下で所有文と呼ぶ。(1a-c)に例示するように、所有文は所有の中核的意味である所有権関係、親族関係、全体部分関係をそれぞれ表す。

- (1) a. Mám nové kolo.⁵ (所有権関係)
mít.1SG.PRS 新しい.SG.ACC 自転車.SG.ACC
「私は新しい自転車を持っている」
- b. Mám bratra a sestru. (親族関係)
mít.1SG.PRS 兄.SG.ACC と 姉.SG.ACC
「私には兄と姉がいる」
- c. Tento stůl má dlouhé nohy. (全体部分関係)
この.SG.NOM 机.SG.NOM mít.3SG.PRS 長い.PL.ACC 脚.PL.ACC
「この机は脚が長い」

所有文は、これらの典型的な所有には当てはまらない様々な関係も表すが、これら周辺的關係の範囲はこれまで明確にされていない。本稿は、所有の中核的意味のうち、(1c)のような全体部分関係を表す所有文に着目し、これと周辺的關係を表す所有文との関連を示すことによって、所有文の周辺的な用法を部分的に整理する。以下、ある関係を全体部分関係として捉える要因として恒常性が関わっていることを確認した上で(2節)、所有文と存在文の振る舞いから、全体部分関係には内在的なものと外在的なものがあることを示す(3節)。さらに、所有文が一時的な関係を表す際の動機づけについて検討する(4節)。最後に、経験のゲシュタルトとしての全体部分関係を構成する諸特徴を展望として示す(5節)。

2. 全体部分関係と恒常性

所有文は、主語の指示対象（所有者）と目的語の指示対象（所有物）の間に何らかの關係が成立していることを表現する。例えば、(2a-d)の所有文は、所有者（その城、ホンザ、タイタン、その動物園）を構成する一部として所有物（美しい壁、長い脚、大気、パンダ）が存在することが表されている。

⁵ 例文はすべて作例であり、容認性の判断はボヘミア地方出身20代後半男性のチェコ語母語話者による。

- (2) a. Ten hrad má krásnou zed'.
 その.SG.NOM 城.SG.NOM mít.3SG.PRS 美しい.SG.ACC 壁.SG.ACC
 「その城は壁が美しい」
- b. Honza má dlouhé nohy.
 ホンザ.SG.NOM mít.3SG.PRS 長い.PL.ACC 脚.PL.ACC
 「ホンザは脚が長い」
- c. Titan má atmosféru.
 タイタン.SG.NOM mít.3SG.PRS 大気.SG.ACC
 「タイタンには大気がある」
- d. Ta zoologická zahrada má pandy.
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM mít.3SG.PRS パンダ.PL.ACC
 「その動物園にはパンダがいる」
- e. *Ten stůl má knihu.
 その.SG.NOM 机.SG.NOM mít.3SG.PRS 本.SG.ACC
 「その机の上には本がある」を意図。

ある対象がほかの対象を構成する一部であると捉えられるとき、その二者間の関係を全体部分関係と呼ぶ。では、そのように捉えられるためには何が必要であると言えるだろうか。ここで、(2a-d)の所有文が表す時間的な特徴に注目してみる。(2a)では、「その城」が存在している間、「美しい壁」がその一部であるという関係も成立し続けると解釈される。(2b-d)についても同様である。一方で、「その机」が存在している間、その上に「本」があるという関係が成立し続けるとはふつう解釈されないが、この関係を表すものとして(2e)の所有文は容認されない。ここで「時間軸上で、主語の指示対象が存在する範囲と、述語が表す関係が成立する範囲が重なっている程度」を「恒常性」と呼び、恒常性が高い関係を恒常的な関係、恒常性が低い関係を一時的な関係とそれぞれ呼ぶ。二者間に成立する関係を、ある対象がほかの対象を構成する一部であるという関係(つまり全体部分関係)として捉え、所有文で表現するためには、少なくともそれが恒常的な関係として捉えられている必要があるように見える。

(3a)は「その美容室」と「たぐさんの人」の関係を表す所有文だが、これは「その美容室に(今)たぐさんの客がいる(混んでいる)」という関係を表すものとしては容認され

ず、「その美容室には美容師がたくさんいる」のように解釈される。これは、「美容室」にとって、「たくさんの客」よりも「たくさんの美容師」の方が恒常性が高いと捉えられることの反映であると考えられる。(4a-b)のように、「その美容室」に「たくさんの客」が「いつも」いるという関係であれば、所有文で表現することができる。所有文で表現するための要因に恒常性が関わっていることがこれによっても確認できる。

- (3) a. To kadeřnicví má hodně lidí.⁶
 その.SG.NOM 美容室.SG.NOM mít.3SG.PRS たくさん 人.PL.GEN

「その美容室には人 {従業員/* (今) 客} がたくさんいる」

- b. Ta klinika má hodně zákazníků.
 その.SG.NOM 歯科クリニック.SG.NOM mít.3SG.PRS たくさん 客.PL.GEN

「その歯科クリニックは

{ (通院している) 人が多い/* (今) たくさん患者がいる}」

- (4) a. To kadeřnicví má vždycky hodně lidí.
 その.SG.NOM 美容室.SG.NOM mít.3SG.PRS いつも たくさん 人.PL.GEN

「その美容室にはいつも客がたくさんいる」

- b. Ta klinika má
 その.SG.NOM 歯科クリニック.SG.NOM mít.3SG.PRS

vždycky hodně zákazníků.
 いつも たくさん 客.PL.GEN

「その歯科クリニックはいつもたくさん患者がいる」

3. 全体部分関係と存在

チェコ語は、場所表現+コピュラ+主格名詞句という構造(以下、存在文)によって、存在を表す。本節では、所有文と存在文を対照することで、所有文によって表される全体部分関係には、存在に近いものと、そうでないものがあることを示す。

⁶ 「hodně+属格名詞句」という構造は、全体として名詞句として振る舞う。ここではこの構造が所有文の目的語となっている。hodněが現れるこれ以降の事例においても同様である。

- (5) a. Tento stůl má dlouhé nohy.
 この.SG.NOM 机.SG.NOM mít.3SG.PRS 長い.PL.ACC 脚.PL.ACC
 「この机は脚が長い」
- b. *U⁷ tohoto stolu jsou dlouhé nohy.
 近く この.SG.GEN 机.SG.GEN COP.3PL.PRS 長い.PL.NOM 脚.PL.NOM
 「この机は脚が長い」を意図。
- (6) a. *Ten stůl má knihu.
 その.SG.NOM 机.SG.NOM mít.3SG.PRS 本.SG.ACC
 「その机の上には本がある」を意図。
- b. Na tom stole je kniha.
 上 その.SG.LOC 机.SG.LOC COP.3SG.PRS 本.SG.NOM
 「その机の上には本がある」

(5a) は全体部分関係を表す所有文の事例である。これは (5b) のように存在文で表すことができない。これとは逆に、存在文の事例 (6b) によって表される関係は、(6a) のように所有文で表すことができない。この振る舞いは、以下のことの反映であると考えられる。つまり、(5a) の机と脚の関係は全体部分関係として捉えられる一方で、場所と存在物の関係としては捉えられないこと、また逆に、(6b) の机と本の関係は場所と存在物の関係として捉えられる一方で、全体部分関係とは捉えられないことである。すなわちここにおいては、(5a) の全体部分関係と (6b) の存在が明確に区別される。

- (7) a. Titan má atmosféru.
 タイタン.SG.NOM mít.3SG.PRS 大気.SG.ACC
 「タイタンには大気がある」
- b. Na Titanu je atmosféra.
 上 タイタン.SG.LOC COP.3SG.PRS 大気.SG.NOM
 「タイタンには大気がある」

⁷ 属格支配の前置詞。場所（「～の近く、～に接して」）を表す。場所を表す前置詞は na 「～の上、～の中」、v 「～の中」等、他に数種類あるが、(5b) はそのどれを用いても容認される文にはならない。

しかし両者の中間には、どちらかの関係に明確に分類できない事例が多数存在する。例えば (7a-b) は、客観的には同じ関係を、所有文と存在文のどちらによっても表現することが可能な事例である。これが可能なのは、タイタンと大気の関係について、大気がタイタンの一部を構成するものであるという捉え方と、タイタンという場所に大気が存在しているという捉え方のどちらもが可能であることを反映するものであると考えられる。(5a)からも分かるように、全体部分関係は一時的に成立しているものではなく、安定して成立し続けるもの(恒常的)である。(6)において本が机という場所に存在するという関係が一時的なものである(のが普通である)のに対して、タイタンと大気の関係が一時的なものではなく恒常的なものであるという知識⁸を我々は持っている。両者の関係が恒常的であるというこの知識が、(6a)が容認されないのに対して(7a)が可能である要因、言い換えればこの関係を全体部分関係として捉えられるかどうかを分ける要因であると考えられる。

また、(5a)の机と脚の関係は存在文で表せない、つまり場所と存在物の関係として捉えられないが、これに対して、タイタンと大気の場合にはこれが可能である。このことは、机と脚、タイタンと大気それぞれの間の全体部分関係に(どちらも所有文で表すことが可能であるものの)何らかの違いがあることを示唆している。ここで、(8-9)を対照する。

- (8) a. Ten hrad má krásnou zeď.
 その.SG.NOM 城.SG.NOM mít.3SG.PRS 美しい.SG.ACC 壁.SG.ACC
 「その城は壁が美しい」
- b. *U toho hradu je krásná zeď.
 近く その.SG.GEN 城.SG.GEN COP.3SG.PRS 美しい.SG.NOM 壁.SG.NOM
- (9) a. Ten hrad má příkop.
 その.SG.NOM 城.SG.NOM mít.3SG.PRS 堀.SG.ACC
 「その城には堀がある」
- b. U toho hradu je příkop.
 近く その.SG.GEN 城.SG.GEN COP.3SG.PRS 堀.SG.NOM
 「その城には堀がある」

⁸ タイタンという特定の衛星とその大気についての知識を持っていなかったとしても、天体と大気の一般的な関係についての知識から、この特定の場合における関係についても推測することができる。

(8) 城と壁、(9) 城と堀の関係はどちらも恒常的であり、全体部分関係として捉えることが可能なために、どちらも所有文で表現することができる。ところが、前者は存在文で表すことができないのに対して、後者はこれができる。所有文によって表される全体部分関係のうち、存在文で表すことが不可能なものを全体部分関係A、可能なものを全体部分関係Bと以下で呼ぶ。この振る舞いの違いには、部分が全体に対してどれだけ不可欠で不可分な要素であるかという程度が関わっていると考えられる。典型的な城を想起する際に必ず壁が想起される（想起せざるを得ない）のに対して、堀は必ず想起されるものとは言えないだろう。また、壁のない城を想起するのは困難だが、堀のない城は容易に想起することができる。この意味で、壁と堀がそれぞれ城に対して持つ関係は異なっている。この、部分が全体に対してどれだけ不可欠で不可分な要素かという程度を以下で内在性と呼ぶとすると、城に対して、壁は堀よりも内在性が高い（内在的である）と言える。一般化すると、全体部分関係Aは内在的であるのに対し、全体部分関係Bは内在性が低い（外在的である）。

叙述所有によって全体部分関係を表す場合、部分を表す名詞句は修飾語を含むことが自然であると言われる（Dixon 2010: 266）が、これは特に、（少なくともチェコ語の場合）部分の内在性が高い場合に当てはまる。内在的な全体部分関係では、全体が存在するならば部分が存在する（例えば机があれば脚もある）ことは自明である。そしてここでの叙述所有はまさに全体部分関係が成立することを（限定所有のように前提とするのではなく）述べる形式だが⁹、内在性が高くこの関係が自明のものである(2a)(5a)(8a)においては、部分が存在すること自体は当然のことであるため情報価値は低い。価値の高い情報になりうるのはそれがどんな部分かという点であり、したがって修飾語を伴うのが自然になる。これに対して、外在的な全体部分関係を表す(7a)や(9a)では、目的語の指示対象が主語の指示対象の一部として存在することが必ずしも自明ではない（例えば城の一部として常に堀があるとは限らない）ため、それがどんな一部かにかかわらず、その一部が存在することが述べる価値のある情報になりうる。そのため、これらの場合には部分を表す名詞句が修飾語を含んでいなくても自然な文となるのだと考えられる¹⁰。

⁹ 限定所有「机の脚」を含む節「机の脚が折れた」では、机と脚の間に全体部分関係が成立することは前提とされ、その上で述語を含む節全体の事象が成立することが述べられる。ここでの限定所有の機能は部分を同定すること（何の部分か）であり、それがどのような部分かは必ずしも重要な情報ではない。

¹⁰ 部分を表す名詞（句）に修飾語を伴う全体部分関係の全体、部分、修飾語をそれぞれX、Y、Zとすると、日本語の二重主語構文に「XはYがZ」という形で自然に翻訳することができる。参照点からターゲットにアクセスしつつ、ターゲットがどのようなものであるかを述べるという両者の共通点のためであると考えられる（cf. Langacker 2001）。

- (10) a. Tato židle má opěradlo.
 この.SG.NOM 椅子.SG.NOM mít.3SG.PRS 背もたれ.SG.ACC
 「この椅子には背もたれがある」

- b. ?Na této židli je opěradlo.
 上 その.SG.LOC 椅子.SG.LOC COP.3SG.PRS 背もたれ.SG.NOM
 「この椅子には背もたれがある」

内在性（外在性）は当然、程度問題であるため、内在的とも外在的とも明確に区別できない場合があり、それを反映して存在文で表現するのが自然かどうか微妙なケースがあることが予想される。例えば、(10a)の所有文によって表される全体部分関係は、(10b)のように存在文によっても表現することができるが、(7b)や(9b)に比べて容認性が低い。

- (11) a. *Ten strom má balón.
 その.SG.NOM 木.SG.NOM mít.3SG.PRS 風船.SG.ACC

- b. Na tom stromě je balón.
 上 その.SG.LOC 木.SG.LOC COP.3SG.PRS 風船.SG.NOM
 「その木には風船がある（引っかかっている）」

- (12) a. ?Ten strom má vosí hnízdo.
 その.SG.NOM 木.SG.NOM mít.3SG.PRS 蜂の.SG.ACC 巣.SG.ACC
 「その木には蜂の巣がある」

- b. Na tom stromě je vosí hnízdo.
 上 その.SG.LOC 木.SG.LOC COP.3SG.PRS 蜂の.SG.NOM 巣.SG.NOM
 「その木には蜂の巣がある」

また、所有文で表せるかどうか（全体部分関係として捉えられるかどうか）についても中間的な事例があることが予想される。(11b)における木と風船の関係は一時的なものであり、これを（全体部分関係として捉えて）所有文(11a)で表すことはできない。一方で(12b)での木と蜂の巣の関係は、文脈によっては所有文(12a)によって表現できる¹¹。(12a-b)における二者の関係は完全に恒常的なものではない（つまり木があり続ける限り蜂の巣も

¹¹ 例えば、話し手と聞き手が実際に木の前に立ち蜂の巣を指差しているような場合。

あり続けるわけではない)が、一定の期間(少なくとも木と風船の関係より)は持続し続ける関係であるのが普通であるため、相対的に容認性が高くなるものと考えられる。

表1 所有文と存在文

		所有文	存在文
内在的	恒常的 (全体部分関係 A)	○	×
外在的	恒常的 (全体部分関係 B)	○	○
	一時的	×	○

以上をまとめたのが表1である。内在的かつ一時的な関係はそもそも成立し得ないと考えられるため表には含まない。上で述べたように、内在的な関係と外在的な関係、恒常的な関係と一時的な関係にはそれぞれ中間的な事例があり、常に明確に区別できるものではない。この意味で、内在的な全体部分関係から外在的な全体部分関係、さらに全体部分関係として捉えられるかどうかに関して中間的な関係が連続的に存在すると考えられる。

4. 恒常性が低くても所有文によって表現される場合

4.1. コントロールによって動機づけられる事例

ここまでの議論で、二者間の関係を全体部分関係として捉えるための要因として恒常性に関わっていることを示した。一方で、(13a)に対して(13b)の所有文が表している関係の恒常性は必ずしも高いと言えないように見えるが、それにもかかわらず全く自然な文である。

- (13) a. Ta zoologická zahrada má pandy.
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM mít.3SG.PRS パンダ.PL.ACC

「その動物園にはパンダがいる」

- b. Ta zoologická zahrada má
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM mít.3SG.PRS

ted' pandy ale jindy ne.
 今 パンダ.PL.ACC しかし 別の時 NEG

「その動物園には今パンダがいるが、いない時もあった」

さらに、(14a-c)は、恒常性の点では違いがないにもかかわらず、容認性が異なる。

- (14) a. Ta zoologická zahrada včera měla pandy.
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM 昨日 mít.3SG.PST パンダ.PL.ACC
 「その動物園には昨日パンダがいた」
- b. ?Ta zoologická zahrada včera měla hodně lidí.
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM 昨日 mít.3SG.PST たくさん 人.PL.GEN
 「その動物園には昨日たくさん人（客）がいた」を意図
- c. *Ta zoologická zahrada včera měla
 その.SG.NOM 動物園.SG.NOM 昨日 mít.3SG.PST

 hodně opic.
 たくさん 猿.PL.GEN
 「その動物園には昨日（野生の）猿がたくさんいた」を意図

この容認性の違いは何に起因するのだろうか。これらの文が表す事態をより細かく分析してみる。(14a) が表す事態を理解するためには、主語である zoologická zahrada 「動物園」が動物を飼育する施設の種類であること、様々な種類の動物を収集、飼育、管理し、一般に公開していること、これの運営には動物の飼育員を含む職員が関わっていること、来園客は入園料を支払って動物を見学することなどを始めとして、様々な一般的知識が必要であると考えられる。(14a) はこれらの知識をもとに、ふつう、「その動物園では、昨日の時点で、複数のパンダを飼育、管理、公開していた」のように解釈される。具体的には、複数のパンダを飼育、管理、公開していたのは、動物園の運営に関わる不特定の職員であり、これら不特定の人間がパンダの状態や位置を変化させることができた（公開するかどうかを選択したり、必要に応じて屋外の放飼場から屋内の飼育室に移動させるなどできた）のように解釈されるだろう。つまり、「ある参加者が他の参加者に対して能動的に働きかけ変化をもたらすことができるという関係」が成立している。この関係をコントロール¹²と呼ぶ。

¹² これは、次に示す Langacker (2009: 83-84) による control の概念のうち、本発表の内容に特に関わる部分を簡潔な形で表したものである。

In prototypical instances of possession, the possessor (R) actively controls the possessed (T) in some manner – physically, socially, or experientially. The flip side of R controlling T is that R has an exclusive privilege of access to T. In the case of ownership (e.g. my pen), R manipulates T, determines where T is kept, and can use T whenever desired. This control also has social and experiential components. Others acknowledge these privileges. Moreover, R knows where T is and determines whether others can use it.

- (15) Mám ted' v ruce hrnek.
 mít.1SG.PRS 今 中 手.SG.LOC カップ.SG.ACC

「私は今、手にカップを持っている」

例えば、(15)のように所有者が人間であり、かつ所有物が無生物の具体物である場合には、通常、所有者の所有物に対するコントロールが成立していると解釈される。コントロールは、典型的な所有権関係という所有の中核的意味の特徴のひとつであり、所有文が表すカテゴリー全体の分析に必要な概念である。(15)がふつう一時的な関係であると解釈されることから分かるように、コントロールが成立していれば、一時的な関係であっても所有文で表現することができる場合がある。

つまり、(14a)は所有者である(動物園の運営に関わる)不特定の人間の、「パンダ」に対するコントロールが成立していることを表していると言える。このようにコントロールが成立する関係として捉えられることが、(14a)を所有文で表現する動機づけになっているということである。言い換えれば、(14a)は所有権関係の一種とみることができる¹³。

(14a-c)の容認性がこの順で低くなるのは、動物園の運営に関わる不特定の人間と目的語指示対象(それぞれ「来園客」と「野生の猿」)に対するコントロールを(少なくとも飼育する動物と同じようには)認めることが困難になるからであると考えられる。

また、(14a)が自然な文であるのに対して(16)は容認されないが、これは「動物園」の場合と比べ、「この森」に関わる不特定の人間を想起し難いためと考えられる。このことも、(14a)の所有者が「動物園」の意味のうちに含まれる人間であることを示している。

- (16) *Tento les včera měla pandy.
 この.SG.NOM 森.SG.NOM 昨日 mít.3SG.PST パンダ.PL.ACC

「この森には昨日パンダがいた」を意図

4.2. 場所表現を含む場合

また、一時的で、所有者が無生物であるためコントロールが成立しているとは解釈できないにもかかわらず所有文で表現することができる場合として、文中に副詞句の場所表現を含む場合が挙げられる(17a-b)。

¹³ただし、少なくとも、特定の個人ではなく不特定複数の人間が所有者であるという点で、典型的な所有権関係からは逸脱している。

- (17) a. Ta mikina *(tu) má prach.
 その.SG.NOM パーカー.SG.NOM ここに mít.3SG.PRS ほこり.SG.ACC
 「そのパーカーは（ここに）ほこりがついている」

- b. Ten strom *(tam) má balón.
 その.SG.NOM 木.SG.NOM そこに mít.3SG.PRS 風船.SG.ACC
 「その木は（あそこに）風船が引っかかっている」

コントロールのない一時的な関係で場所の限定がないと不自然になるのは、主語指示対象が人間の場合も同様である。(18)は例えば公園のベンチに座っているときに目の前にハトが集まっている様子を電話で誰かに伝えている文脈で自然な表現である。この文から場所表現 *tu* 「ここに」を取ると容認性が下がる。これは、一時的でコントロールを伴わない関係を表す所有文が、主として所有物の存在する位置を示す機能を果たしている、言い換えれば存在文が表す意味に接近しているためであると考えられる（浅岡 2017）。

- (18) Mám *(tu) hodně holubů.
 mít.1SG.PRS ここに たくさん ハト.PL.GEN
 「（ここに）たくさんハトがいるんだ」

4.3. 対比の文脈の場合

さらに、一時的で、コントロールが認められない関係であり、かつ場所の限定がなくとも、主語指示対象を他の対象と対比する文脈であれば所有文が容認される場合がある。

- (19) Tento stůl má knihu *(a
 この.SG.NOM 机.SG.NOM mít.3SG.PRS 本.SG.ACC そして

 tam ten druhý stůl má hrnek).
 そこ その.SG.NOM 別の.SG.NOM 机.SG.NOM mít.3SG.PRS カップ.SG.ACC
 「この机は本が載っていて、そっちの机にはカップが載っている」

(19)の先行節単独では、「この机」の上に「本」があるという関係を表す表現として容認されないが、「その机」の上に「カップ」があるという関係を表す節が後続すると自然な表現になる。

なぜ、主語の指示対象を対比する文脈においては、一時的でコントロールのない関係であっても所有文で表現することができる場合があるのだろうか。この振る舞いを動機付け

ているのは、そもそも典型的な全体部分関係を表す所有文に、主語の指示対象がどのような特徴を持つのかを、述語が表す関係によって描写する（全体的特徴を、どんな部分をもつかということによって示す）機能があることだと考えられる。例えば(2a-d)では、「その城」「ホンザ」「タイタン」「その動物園」の特徴が、それぞれ「美しい壁」「長い脚」「大気」「パンダ」がある／いるということによって描写されている。ここで「特徴が描写される」とは、その対象が、上位のカテゴリーを共有する他の対象から区別するのに必要な情報が示されることであると言える。例えば(2a)では、「その城」が「城」の一種であるという知識を前提として、「城」の一種であるような他の対象から、「美しい壁」と恒常的な関係を持っているということによって「その城」が区別されることが示されると考えることができる。(2a)から「美しい」を取った場合には容認性が下がるが、これは単に「壁がある」ことによっては「その城」を他の「城」から区別する特徴を述べたことにならないということを示している¹⁴。同様に、(2b)では「ホンザ」が「人間」の一種であるという知識を前提として、「人間」の一種であるような他の対象から、「長い脚」と恒常的な関係を持っているということによって「ホンザ」が区別されるということが示されている。そもそも「長い脚」というのは、他の人間と対比してのことであり、他の人間との対比がなければ、「長い脚」ということに意味を与えることができない。(2a-d)のような恒常的な関係に対して、(2e)が表す「本がある」のような一時的な関係では、「その机」が持つ恒常的な特徴を描写することはできない。言い換えれば、本があつたりなかつたりするというだけでは、この特定の机を他の任意の机から区別することはできない。これが(2e)の容認性が低い理由であると考えられる。

一方で、(19a-b)のような対比の文脈においては、一時的な関係しか持たない対象によって、主語の指示対象がどのような対象であるかを示す機能を果たしうる。これは、主語の指示対象を、上位のカテゴリーを共有する他のあらゆる対象から区別するのではなく、その文脈において対比されている対象と区別することさえできれば、問題の対象の特徴を描写したことになるからであると考えられる。つまり、その特定の文脈において対比されている他の机と何が違うかだけを述べれば、その特定の机がどのような机であるかを述べたことになる。これに動機づけられて、(19a-b)のような典型的な全体部分関係からは逸脱する関係を表す所有文が成立していると言えるだろう。

¹⁴ これは、3節において、内在的な全体部分関係である(2a)などでは部分が存在すること（城に壁があること）自体の情報価値が低いと述べたことを、より具体的に言い換えたものである。

5. 展望：経験のゲシュタルトとしての全体部分関係

二者間の関係を全体部分関係として捉え、所有文で表現することには、それが恒常的な関係であるという要因が関わっている。そして、恒常性が高い関係の中には、存在文によっても表現されうるものとそうでないものがあり、この振る舞いには本稿で内在性と呼んだ意味的な特徴が関与している。したがって、所有文が表す全体部分関係を特徴づけるためには、少なくとも恒常性と内在性という概念が必要である。以上が前節までの議論のまとめである。

恒常的であることと内在的であることは、二者間の関係を全体部分関係として捉え、所有文で表現するための必要条件でも十分条件でもない（つまり恒常的な関係でなくとも所有文で表現されうるし、恒常的な関係であっても所有文で表現できない場合がある。内在性に関しても同様）。しかし、全体部分関係を必要十分条件によって狭く厳密に規定することは（仮にそれが可能であるとしても）、所有文が表すカテゴリーの複雑な様相を特徴づけるために有用な手段とは言えない。むしろ、求められるべきは、全体部分関係としてゆるく括られる様々な関係の多様性をすくい取りつつ、同時に所有文が表す他の関係との連続性を示すような特徴づけである。

そこで、解決すべき課題を少なくとも二つ挙げるができる。すなわち、(i) 二者間の関係を全体部分関係として捉えることに関わる他の要因を示すこと、(ii) 全体部分関係が、所有文の表す他の関係とどのように関わっているか（これらの関係を同じ形式で表現する動機づけは何か）を示すことである。これらの課題を解決するためには、典型的な全体部分関係を、経験のゲシュタルト (experiential gestalt)¹⁵として特徴づける必要がある。つまり、(i) の課題とは、全体部分関係のゲシュタルトを構成する複数の特徴を同定することである。これらの特徴は、ある関係を全体部分関係として捉えるための必要条件や十分条件ではなく、複数の特徴をより多く満たす関係であるほど全体部分関係として捉えられやすくなる、という性質のものである。内在性や恒常性も、全体部分関係のゲシュタルトを構成する特徴の一部として位置づけられるだろう。そして (ii) の課題とは、全体部分関係のゲシュタルトを構成する特徴が、所有文が表す（所有権関係や親族関係などの）他の関係のゲシュタルトを構成する特徴と部分的に共通であることを明示することである。これによって、典型的な事例においては全体部分関係と明確に異なる所有権関係や親族関係などの諸関係が、それぞれの周辺の事例においては共通の特徴を持つことで重なり合っていることが示されるだろう。例えば (13a) のような事例は恒常的でありかつコントロールを

¹⁵ 複数の特徴が日常生活の中で繰り返し現れ、それらが一つの（全体の方がその構成要素よりも基本的であると感じられる）まとまりとして経験されるとき、それを経験のゲシュタルトと呼ぶ (Lakoff & Johnson 1980、西村 1998)。Taylor (1996: 340) は所有権関係のゲシュタルトを構成する特徴を列挙している。

含む関係を表していると言える。つまり、このような事例は所有文が表す関係のカテゴリー全体の中で、全体部分関係と所有権関係が重なる部分に位置づけることができる。このようにして所有文が表す諸関係が全体として家族的類似性によって連続体を構成していることを明示することができれば、著しく異なるように見える全体部分関係、所有権関係、親族関係などが単一の形式によって表現されることの動機づけが示されたことになる。現時点で全体部分関係を経験のゲシュタルトとして詳細に特徴づけることはできないが、以下、今後の展望として、 α と β の間に成立する関係を全体部分関係として捉えることに関与する諸特徴を挙げる。

まず、 β が依存的な概念である。言い換えれば、 β は他の何らかの概念との関連においてのみ成立する概念である。例えば、(20a) の全体部分関係において、所有物（nohy 「脚」）は何らかの対象（つまり全体である机や人間など）との関連においてはじめて成立する概念である（脚は何らかの全体にとっての脚である）。これは、(20b) のように親族関係を表す事例や (20c) のように属性を表す事例と共通の特徴と言えるだろう。つまり、弟は誰かにとっての弟であり、大きさは何かの対象にとっての大きさである。

- (20) a. Tento stůl má dlouhé nohy.
この.SG.NOM 机.SG.NOM mít.3SG.PRS 長い.PL.ACC 脚.PL.ACC
「この机は足が長い」
- b. Honza má bratra.
ホンザ.SG.NOM mít.3SG.PRS 弟.SG.ACC
「ホンザには弟がいる」
- c. To koupaliště má velikost
その.SG.NOM プール.SG.NOM mít.3SG.PRS 大きさ.SG.ACC
dětského brouzdaliště
子供の.SG.GEN プール.SG.GEN
「そのプールは子供用プールほどの大きさだ」

次に、 α と β の間に成立する関係は排他的である。言い換えれば、 α の所有物は様々ありえても、 β の所有者は α だけである。例えば (21a) のような全体部分関係において、「この机」の部分は様々あるが、この「長い脚」の全体であるのは「この机」だけである。(21b) のような典型的な所有権関係においても、ある所有物（青い自転車）の所有者は一人

(エリシュカ) だけである。この排他性という特徴は、典型的な全体部分関係や所有権関係から逸脱する関係、例えば (21c-d) においても見られる特徴である。

- (21) a. Tento stůl má dlouhé nohy.
 この.SG.NOM 机.SG.NOM mít.3SG.PRS 長い.PL.ACC 脚.PL.ACC
 「この机は足が長い」
- b. Eliška má modré kolo.
 エリシュカ.SG.NOM mít.3SG.PRS 青い.SG.ACC 自転車.SG.ACC
 「エリシュカは青い自転車を持っている」
- c. Mars má dvě družice.
 火星.SG.NOM mít.3SG.PRS 2つの.ACC 衛星.PL.ACC
 「火星には2つ衛星がある」
- d. To město má zajímavou historii.
 その.SG.NOM 街.SG.NOM mít.3SG.PRS 興味深い.SG.ACC 歴史.SG.ACC
 「その街には興味深い歴史がある」
- e. Kateřina má chřipku.
 カテジナ.SG.NOM mít.3SG.PRS インフルエンザ.SG.ACC
 「カテジナはインフルエンザにかかっている」

また、典型的な全体部分関係においては、(22a) のように、 α が占める空間の内部に β が存在するが、この特徴を満たすにもかかわらず、(22b) のような事例は容認されない。このことから、 α という体系が機能するにあたって β が明確な役割を果たしているという特徴も全体部分関係のゲシュタルトを構成する一つの要素であると言えるだろう。つまり、「机」の機能（人間が読み書きなどの作業をするための水平な台となること）にとって「脚」の役割（水平な台を一定の高さで支えること）は明確である一方で、「机」の「左半分」が「机」の機能にどのように貢献しているかは（少なくとも大抵の場合）不明である。

- (22) a. Tento stůl má dlouhé nohy.
 この.SG.NOM 机.SG.NOM mít.3SG.PRS 長い.PL.ACC 脚.PL.ACC
 「この机は足が長い」

- b. *Tento stůl má levou polovinu.
 この.SG.NOM 机.SG.NOM mít.3SG.PRS 左の.SG.ACC 半分.SG.ACC
 「この机には左半分がある」

上に挙げた特徴をまとめると下のようになる。これらが全体部分関係のゲシュタルトを構成する特徴であることを説得的に示しつつ、関与しうる他の特徴を同定していくためには、より詳細な所有文の記述が必要である。これは今後の課題としたい。

- A. α と β の間に成立する関係は持続し続ける (恒常性)
- B. α を想起すると β も想起される (内在性)
- C. β は依存的な概念である
- D. α と β の間に成立する関係は排他的である
- E. α が占める空間の内部に β が存在する
- F. α という体系が機能するにあたって β が明確な役割を果たしている

略号一覧

ACC: 対格、COP: コピュラ、GEN: 属格、LOC: 前置格、NEG: 否定、NOM: 主格、PL: 複数、PRS: 現在、PST: 過去、SG: 単数

参考文献

- 浅岡健志朗 (2017) 「チェコ語の所有動詞 *mít* が表す所有権関係と存在」『東京大学言語学論集』東京大学, 第38号, 1-24.
- Dixon, R. M. W. (2010). *Basic Linguistic Theory*, vol. 2: *Grammatical Topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Heine, Bernd. (1997). *Possession: Cognitive sources, forces, and grammaticalization*. Cambridge studies in linguistics. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George and Johnson, Mark. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1993). 'Reference-point constructions'. *Cognitive Linguistics*. 4. 1-38. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (1995). 'Possession and Possessive Constructions.' In John R. Taylor and Robert E. MacLaury (eds.), *Language and the Cognitive Construal of the World*, 51-79. Berlin: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. (2001). 'Topic, subject, and possessor'. In Simonsen, Hanne Gram and Endresen, Rolf Theil (eds.), *A Cognitive Approach to the Verb: Morphological and Constructional Perspectives*. Cognitive Linguistics Research 16. 11-48. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. (2009). *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」中右実 (編) 『構文と事象構造』 (日英語比較選書 5) 研究社, 107-203.

Pit'ha, Petr. (1992). *Posesivní vztah v češtině*. Praha: AVED.

Stassen, Leon. (2009). *Predicative Possession*. New York: Oxford University Press.

Taylor, John R. (1996). *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press/Clarendon.

Whole-part Relationships Expressed by the Czech Possessive and Existential Sentences

Kenshiro ASAOKA

Keywords: Czech, possession, whole-part relationship, existence, experiential gestalt

Abstract

In the Czech language, the HAVE-type possessive verb *mít* expresses a broad range of relationships including the core meanings of ownership, whole-part relationship and kinship. The present paper points out that some whole-part relationships can be expressed both by the possessive sentence and the existential sentence and that there are (i) relationships that can be expressed only by the possessive sentence (e.g. *table* and *legs*), (ii) relationships that can be expressed both by the possessive and existential sentence (e.g. *castle* and *moat*) and (iii) relationships that can be expressed only by the existential sentence (e.g. *table* and *book*). Two factors are involved in this behavior: the degree to which the part/theme is necessary for and inseparable from the whole/place (inherence), and the degree to which the relationship between the two participants is stable through time (permanence). The relationship in (i) is more inherent than the relationship in (ii) and the relationship in (ii) is more permanent than the relationship in (iii). These two factors determine whether a given relationship is construed as a whole-part relationship or as an existential relationship.

Some relationships, however, could be expressed by the possessive sentence despite their temporary nature. Among these are relationships motivated by the fact that one participant has control over the other, the function of a participant as a spatial reference point, and the function of the possessive sentence in which the subject referent is differentiated from contrasted entities.

Inherence and permanence can be viewed as being among the component parts of the experiential gestalt of the prototypical whole-part relationship.

(あさおか・けんしろう 東京大学大学院)